『アグダスの書』の紹介

岩倉　宣子

1993年レズワンに、万国正義院より英語版の『アグダスの書』（以下『アグダス』）が全世界のバハイ共同体に出されて以来、私の知っているアジアの国々でもいろいろな勉強会がすすめられているようで、あちこちでおもしろい話を聞かされる。マレーシアのあるバハイの人の家には「この部屋には最も聖なる書が置いてある。部屋に入る時は一礼してから入るように」とサインがかけてあるとか、あるLSAでは、この人はまだ『アグダス』を持つ資格がないなどと、『アグダス』を注文するバハイを一人一人チェックしようとして周囲からやり過ぎと注意されたとか。ミャンマーに行った時には、あるバハイの家族の婚約式に参加する機会があったが、結納金１９ミスカルは日本円でいくらか？などときかれた。これは、現時点ではまだ我々に適用されていない『アグダス』の規定(66)に言及したもの。また、『アグダス』では「必須の祈り」の前に顔と手を洗うように規定されているが、それをした後でまずタナカを顔に塗ってから祈りに入ってよいかということが話題になったりした。ちなみに、「必須の祈り」前に顔と手を洗うという規定も、中位の長い祈りの前以外は、現時点では適用されていない。

一方、習慣として食事を手で食べるスリランカでは「食事の時、お椀やお皿に手を突っ込まない」という掟(46)があるため自分たちはフォークか何かを使わねば ならないという 論争が 起こり、結局万国正義院に問い合わせ、「その必要なし。共同の食器に手を突っ込まないように」との指導を得たとのこと。

このような話はたくさんあるが、いずれもきちんと掟を守って、正しい生き方をしたいという各バハイの熱意を示すものである。

日本では、日本語の『アグダス』がまだ出ていないため組織だった勉強会が行われていない。そこで、ここでは、『ケタベ・アグダス』（『アグダスの書』）について一般的な紹介をし、どのような姿勢でこの書に向かうべきかを考えてみたい。

まず、英語版の『ケタベ・アグダス』の構成は、1)序文に次いで、ショーギ・エフェンディのこの書の 描写、それから190節から成る本文 2) エシュラガトの書簡の一部と、 三種類の日々必須の祈り、 会葬の時に集団で唱える故人のための祈り、3) 「質疑応答」107節、4) 守護者による 「概要と 体系化」、5) アラ ビア語のできない 読者には分かりにくいと思われる点、その他さまざまな解説、情報を必要とする点について解説のほどこされた「注釈」からなっている。

現時代のための神の顕示者であり、この書の著者であるバハオラは、『アグダスの書』の中で、「我が単なる法典を汝らに啓示したと思うな。いや、むしろ、我は強大と、威力の指もて、選り抜きの美酒の栓を開けたのである....」と述べておられる。すなわち、この書に向かう時は、その示された法が何であるのかを知るというだけでなく、むしろ、バハオラがこれを人類に示された真意、バハオラの愛に触れるという態度で向かうべきである。

母親が、テレビを見たり、ゲームを楽しんでいるわが子に対し、「もう寝なさい」と忠告するのは、子供たちの翌日のことを心配してのことであり、「きちんと食事をするように」とか「勉強しなさい」とすすめるのも、経験を積んだ親の愛情から出る、将来を見通した訓戒であるということは、誰にでも理解できる。

バハオラと人類全体とは、この親子の関係と同じところがあり、彼は我々のことを気遣い、必要最低限の規律をもってしつけてくださっているのである。このような態度でバハオラの法をとらえ、その指導に従って生きる努力をする時、我々は本当に守られていると実感できる。

最近は、社会全体がものの善悪を決める基準を失い、混乱しきっている。マスコミをにぎわすニュースは、それを反映している。同性間の結婚を社会的に承認すべきだという主張や、アルゼンチンのサッカー選手マラドーナ入国拒否に関する人々の反応などは、その分かりやすい例である。他人に迷惑をかけるわではなく、当事者同士が納得しているのだから認めるべきであるとか、他の国は麻薬に対して寛容だから日本もそのようになるべきだ、などという理屈がまかり通り、あたかもそれが物わかりのよい、知識人の考えであるかのような風潮さえある。

これは、多数が認めている、あるいは個人の自由や権利ということだけを尺度にしているのだが、これに対してバハイはどのような姿勢を持つべきであろうか？

『アグダス』の本文中に、これに関する答えがはっきりと示されている。

「....審判者であり、全知者である方はこのように警告したもう。自由の具現とその象徴は獣である。人間にふさわしいことは、自分の無知から自分を保護できるような節度に従うことであり、不和をもたらす者から自分を守ることである。自由は、人間に礼儀という境界線を超えさせ、その地位の尊厳を侵害させる原因となる。自由は人間を極度の堕落と邪悪の状態に落とす」(123) と。

また、バハイ信教の最高機関である万国正義院が1993年9月17日付けである個人に宛てた手紙にも分かりやすく説明されている。以下は、その引用である。

「人間の生きる目的を知る者は神のみであり、それを各時代の神の顕示者を通じて知らしめたもうのも神であるというのがバハイの教えの基礎です。人間の際立った特徴は、神を知り神を愛し、そして意識的に彼に従うことができるよう、能力を与えられているということにあります。それは即、その逆でもあり、神から遠ざかり、彼を愛すことを拒否し、彼に逆らう力にもなるのです。動物は、神によって定められた自然の法則に完全に束縛されているため、生来の本能にそった行動しかできません。今、世間では、他人を傷つけない限り各自自分の欲すること、自分が幸せと感じることをしてよいのではないかという考え方が一般的です。この考え方は、抑圧された社会にある現代人にはきわめて魅力的です。しかし、この考えの実際面での大きな問題のひとつは、何がどの程度害になるかは人によって違うという点です。もうひとつは、一般的に人は人間の存在について神が意図された目標を知らないという点です。人は互いに喜ばしい行いを規定するにあたり、援助が必要なだけでなく、自分たちの精神的ダメージを避けるために指導を必要とします。

人は人生の目的に沿って生きる時、最も大きな喜びと自由を経験します。同時に、このような生き方をする人は、お互いに調和の中に生きていることを実感します。皆が、創造主の目的に沿って生きているのですから、それは当然のことですが、これにはその目的を学び、その指針に従い、示された規定を守る努力が必要です。人間は動物的側面と精神的側面を持ちます。私たちは動物的欲求をコントロールし、それを超越し、生活に精神性を注入する能力を持っています。神の顕示者のメッセージに応えることによって、私たちはいかに生きるかを学び、それによって精神的に強められます。神の言葉を勉強し、神の勧告に従う訓練をすることで、私たちは神が人間に定められた最高の地位に上がることができるのです。」

神が勧告されている生き方を知り、その生き方に自分を従わせて初めて、人は本当に自由になり動物的本能の束縛から解放されたといえる。

それでは、神が勧告されている生き方を示す「法の書」『ケタベ・アグダス』が、どのような背景から生まれ、どのような内容を持つかについて、守護者ショーギ・エフェンディと万国正義院の説明を見てみよう。

『アグダス』はバハオラの啓示の母なる書、最も聖なる書といわれ、1873年、バハオラがアッカのアブードの家に滞在中に啓示された。しかし、バハオラは、これを啓示後もすぐには信者に公開されなかった。

バハオラは、すぐれたアラビア語を駆使し、非常に濃縮された、簡潔な言葉ですべてを表現されている。そのため、翻訳にあたっては、その言語の持つ美しさや、力強さを保ち、暗示的意味合いを含むものの場合はそれを含ませて訳さなければならない。なお、『アグダス』の原典には、各節に番号はついていないが、英訳には分かりやすくするため一節毎に順番に番号が付されている。

次は『ケタベ・アグダス』について言及されたことである。

＊100冊以上にのぼるバハオラの聖なる書の中で、独特の重要性を持つもの

＊バハオラの創造の力が最も強力に放出されているもの

＊バハオラが、到来された目的である新しい世界秩序の憲章

＊バハオラの啓示の貴重な宝物が収められている宝庫

＊「われが、わが命令と禁止という星をもって飾った天である」

＊『アグダス』は他の宗教制のいかなる書とも異なり、宗教の創造者自身が啓示されたものであり、根本的な法だけでなく、自分の後継者、信教の一体性を保証する機構　ー　正義院の機構、聖約の中心、守護者制　ー　も定めている。

『アグダス』の規定は、過去の諸宗教が確立した基盤の上に据えられている。これは、神の信教は過去と未来永劫にわたり変わらないということを示すものである。

バハオラの啓示によって、過去の概念が新しい理解の段階に高められ、新しい時代に適した社会的法律が制定された。具体的に言えば、過去の啓示者の教えのうち永遠の真理、神の唯一性、隣人への愛、この世の生活における道徳的目標などは再び述べられ、一方、古い教えの中で世界的な和合と人間社会再建の障壁になる要素は排除されている。(162)　中には特定のグループや人々に向けられた掟もある。例えば、「懺悔の禁止」(34)は特にキリスト教徒（カトリック）にとって、より大きな意味を持つ。法律の多くは過去の宗教制の中で最もバハオラの時代に近いモハメッドとバブの宗教制に関連し、コーランやバヤンに表わされた法律(137～143) に関連して いるが、バハオラはこれらを通じて世界の諸民族が到達すべき知識と行動の新しい水準を解明されている。これらの法律が取り扱っているものはすべて、人類社会に平穏をもたらし、人の行動の基準を高め、人の理解の範囲を広げ、個人の生活を精神的にする。法律は三つの分野にわたる。一つは個人の神に対する関係、二つ目は個人の利益にかかわる身体的、精神的事柄、三つ目は人間間、および個人と社会の間の関係についての規定である。それらは、祈りと断食／結婚・離婚、相続など／その他の法律／禁止令、勧告、過去の宗教制の特定の法律・法令の廃止というような見出しのもとに分類される。すなわち、バハオラは、この書の中で必須の祈り(6) を規定し、断食の時期と期間を定め(16)、会葬の時にする故人のための祈り 以外の集団祈祷を禁止し(12)、ゲブレを定め(137)、ホゴゴラを制度化し(97)、遺産の法を 作り(20～29)、マシュレゴゥル・アズカーの機構を定め(31)、十九日毎のフィースト(57)やバハイの祭典やうるう日を確立(16, 110, 112)、聖職者制度を廃止し、奴制度(72)、 禁欲主義(36)や物乞い(147)や修道院制度、懺悔、説教台(154)の使用、手に接吻すること(34)を禁止されている。また、一夫一婦制(63)を規定し、動物の虐待(187)、怠慢・怠惰、陰口や中傷(19)を咎め、離

婚を非難し(70)、賭け事や阿片(155)、アルコールその他酔いを催す飲料(119)の使用を禁止、殺人や放火(62)や姦通(49)、窃盗に対する罰則(45)を定め、結婚の基本条件(63, 65)を規定、就業を義務づけ(33)、子供の教育(45)を強調し、遺言を書く(109)ことと、自国の政府に従順(64, 95)であることをすべての人に義務付けられた。これらの規定とは別にバハオラは、バハイに対して友情と調和をもって交わる(58)ことや、何らの差別もなくすべての宗教の信者と交わる(144)ことを勧告、また、狂信、扇動行為や論争や闘争に巻き込まれぬ(64)よう忠告された。さらに、一点の汚れもない清潔さ(74)、肉体的純潔(107)、正直や信頼性(120)、礼節(145)、もてなしの精神(16,57)、寛容(153)、正義、公正(148)、を教え、皆が一つの手の指のごとくなり、一つの体の手足のごとく(58)なるよう助言し、立ち上がって彼の大業に奉仕(35, 38)するよう呼びかけ、そうすれば必ず彼の援助があると保証(84)されている。

さらにまた、バハオラは、人の世の無常(40)について述べ、真の自由とは彼の命令に服従すること(123～125)であると宣言され、その法に真剣に従うよう勧告されています。そして、神の啓示の曙を認め(1, 2)、その彼が示されたすべての法を守るという一定の義務を規定(161～165)された。

バハオラは自らこの聖典を真の喜びの源、誤りのない秤(183)、まっすぐな道(186)、人類を蘇生させるものと呼ばれた。そして守護者は、以下のような内容がこの聖典を一層豊かなものにすると述べておられる。

＊アメリカ大陸の共和国の大統領らに宛てた重要な呼びかけ(88) -- 神の日において与えられた機会をつかみ、正義を擁護せよ。

＊世界中の議会メンバーへの勧告(189) -- 世界共通の文字と言語を採用するように。

＊ナポレオン三世の制服者、ウィルヘルム一世への警告(86)。

＊オーストリア皇帝フランツ・ヨゼフ一世に対する叱責(85)。

＊ライン川の河畔を人間に見立てて書いた、ベルリンの嘆きへの言及(90)。

＊コンスタンチノープルでの一連の出来事の予告(89)。

ハワイの大陸顧問補佐の一人 Robert A. McClelland は、自分の書いた『ケタ ベ・アグダス学習要領』の中で、『アグダス』の内容を次のようなテーマに分類しているので、参考までにここに紹介する。

神の法への従順(1, 2, 4, 17 など) / 神の法と戒め(1～5, 29 など) / 慈悲と寛容(3, 14, 32 など) / 日々の必須の祈りと手・顔の洗浄(6, 8～14, 18) / 結婚(63, 65～67 など)/ 離婚と再婚(67～70) / 遺言がない場合の遺産相続(20～29, 109) / 清潔と身なりの良さ(46, 74～76 など) / ホゴゴラ(28, 97) / 断食(10, 13, 16) / アブドル・バハ、聖約および守護者制(2, 37, 42 など) / 信教の機構(21～23 など) / 神の賛美（巡礼：32, 礼拝堂：31, 115, 150、１９日毎のフィースト：57, アヤミ・ハ：16、聖なる日：16, 110～112) / 犯罪（阿片：155, 190, 賭け事：155, 放火：62, 姦通：19, 49, 殺人：19, 62, 73, 188, 盗み：45, 同性愛：107) / さまざまな禁制（禁欲生活、アルコール、無為や怠惰、陰口、人を叩く）/ 王様と聖職者（王：78～91, 聖職者：9, 41, 99～104 など) / バハオラの出現と地位を認めること(1, 47, 50, 55 など) / 正義(26, 52, 56, 60 など) / 社会(3, 29, 39 など) / バブの宗教制(20, 65, 77 など）。

『アグダス』の法律は簡潔に示されているのが特徴。そのため多くの法が男性のみに適用されるかのように記されているが、それらは必要な変更を加えて女性にも適用されると守護者の説明がある。例えば、男性に対して自分の父親の妻（義母）との結婚を禁止する(107)文によって、女性も、義理の父親との結婚を禁止されていると見るべきであるという『「アグダス」は、将来何世紀もの間に規定される膨大な法律の中核をなすもので、バハオラは、この法律の拡充の権限を万国正義院

に付与されている。これに関して、アブドル・バハはこう述べている。「神の法律の基盤をなすもので、主に重要な事柄は原典に明確に示されているが、補助的な法律については正義院に委託されている。このことの英知は、時代は常に同じではないということである。変化は、この世と時と空間に必要な特質であり、本質的な属性である。ゆえに、正義院はそれに応じて行動をとるであろう....」と。

万国正義院には、自らが制定した法律を状況に応じて変えたり、廃止したりする権限が明確に与えられている。このような柔軟性は、少なくとも1000年にわたる法典の基礎となるものにとっては、絶対的に不可欠なものといえる。ただし、原典に明確に定められている規定については、万国正義院が手を加えることはできないのである。

ところで、『アグダス』のいくつかの法が想定している社会は、徐々に出現するものである。そこで、バハオラはバハイ法の段階的適用を規定されている。

万国正義院は1993年5月9日付けのすべての全国精神行政会宛ての手紙で、英語版の『ケタベ・アグダス』が出版されたことは、世界中バハイが制約されるべき規定が増えたことを意味するものではないと明言されている。つまり、今まで西洋のバハイたちには適用されていなかったものを、今後万国正義院から正式な指示があるまでは適用されないと説明し、段階的な適用を示しておられる。もちろん、これは日本語訳が出ることに関しても言えることであるため、私達がバハオラの示された「法の書」を日本語で読めるようになったからといって、その日からそのすべての掟に規制されるというわけではないということを念頭に置くべきである。どの部分が適用を見送られるかについては、1974年6月9日付けアイスランド全国精神行政会宛ての万国正義院の手紙にはっきりと挙げられているので参照されたい。バハオラはこの聖典の主なテーマである法令について、全創造物の生命の息吹(2)、最も強大な砦、彼の樹木の果実、世界の秩序と諸民族の安全を維持する最高の手段(2)、彼の英知と愛情ある摂理のランプ(3)、彼の衣の甘美な香り(4)、また創造物に対する彼の「慈悲の鍵」(3)と特徴付けておられる。「それを読み、力の主であり全能者である神によってそこに下された聖句について熟考する者は幸いなり。....忍従の手をもってそれを手にせよ....。」「その甘美を味わう口蓋、そこに秘められているものを認識する関知力ある眼、そしてその暗示的意味と神秘を理解する理解力ある心は幸いなり。....」

「....それを精読する者らは幸いなり。それを理解する者らは幸いなり。それについて瞑想する者らは幸いなり。その意味について熟考する者らは幸いなり。..」

バハオラご自身によってこのように証言されているこの聖典を、われわれは母国語で手にする日も近い。出版されたなら一日も早くこれを自分の手にして、バハオラの証言されているような幸いなる者らの仲間に入れるように努力したいものである。